

第7回関西生殖医学集談会 第51回関西アンドロロジーカンファレンス
大阪, 2019.2.23

バセドウ病治療後患者における体外授精成績

眞鍋麻衣¹、中野達也¹、佐藤学¹、中岡義晴¹、森本義晴²

¹IVF なんばクリニック ²HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

甲状腺機能異常症であるバセドウ病は甲状腺刺激ホルモン受容体に対する抗体が産生され流産リスクが高くなるため、当院では甲状腺ホルモンをコントロールしてから体外受精を行っている。しかし、治療後の胚発生の成績についての報告は少なく、当院での甲状腺機能治療後の胚発生が良好ではない印象がある。本検討ではバセドウ病患者の胚発生、単一融解胚移植での妊娠率と流産率を比較した。

【方法】

検討1: 2011年1月から2018年1月に甲状腺機能治療後に調節卵巣刺激で採卵を行ったバセドウ病患者11症例25周期276個と2017年1月から6月に当院で採卵を行った甲状腺機能正常患者155周期1761個の卵子の成熟率、正常受精率、Day3移植可能胚(Grade3以上、5分割以上)率、胚盤胞率を比較した。検討2: 検討1と同期間のバセドウ病患者59周期と2016年1月から6月の正常患者176周期と139周期の単一胚移植における分割期胚、胚盤胞の臨床的妊娠率、流産率をそれぞれ比較した。

【結果】

検討1: バセドウ病患者は正常患者と比べ、成熟率(71.4% vs. 84.2%)、正常受精率(82.2% vs. 82.3%)、Day3移植可能胚率(64.8% vs. 66.8%)で差がなかったが、胚盤胞率(30.7% vs. 59.1%)で低かった(P<0.01)。検討2: バセドウ病患者と正常患者の妊娠率は、分割期胚移植(22.2% vs. 23.3%)、胚盤胞移植(36.4% vs. 46.8%)で差はく、流産率も分割期胚移植(7.4% vs. 9.1%)、胚盤胞移植(10.2% vs. 9.4%)で差はなかった。

【考察】

バセドウ病は、甲状腺ホルモンコントロール後の不妊治療により、流産リスクは下げられているが、胚盤胞までの発育能が低いことから胚質に影響が残っている可能性がある。